

## 研究報告

修士課程における助産師教育での修了前客観的臨床能力試験 (OSCE) を受験する  
学生の行動に影響を与える要因と効果的な修了前 OSCE の検討

岡山 真理 森兼 眞理 山名 香名美  
五十嵐 稔子 中西 伸子 脇田 満里子  
奈良県立医科大学大学院看護学研究科

Factors that affect students' behavior and effective methods in objective structured clinical  
examination before the completion master's program of midwifery education

Mari Okayama Mari Morikane Kanami Yamana  
Toshiko Igarashi Nobuko Nakanishi Mariko Wakita  
Graduate School of Nursing, Nara Medical University

## 要旨

修士課程における助産師教育での課程修了前 OSCE を受験する学生の行動への影響要因を分析し、その特徴を明らかにすること、および効果的な修了前 OSCE の方法について検討することを目的に、修了前 OSCE を受験した本学の助産学実践コース 2 年次生 3 名を対象に半構造化面接を行い、データを質的帰納的に分析した。修了前 OSCE を受験する学生の行動に影響する要因として、【実習で獲得した実践能力の発揮】【就職前に再認識され、明確化した課題とモチベーションの上昇】【発揮できなかった本来大切にしているケア】【ケア実施を支えるロールモデルの存在】【学内演習での教員の根本的な実技伝達】【信頼獲得のために大切にしているケア】【実習からのブランクにより薄れた目標や課題とそれに伴う不安】【知識・経験の基盤となる分娩介助手順】の 8 カテゴリーが抽出された。そして、効果的な修了前 OSCE のためには、1)実施要項および学生への告知方法の改善、2)適切な模擬産婦の選定、3)実際の分娩との乖離を最小限にする状況設定が必要であると考えられた。

キーワード：客観的臨床能力試験 (OSCE)、助産師教育、修士課程

## I. 背景

客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination:以下 OSCE とする)とは、学生の精神運動領域および情意領域の学習効果を評価し、臨床実践能力の達成度を客観的に評価する技術試験のことであり、1975 年に R.Harden の提唱によって医学教育において始められた (Harden, et al, 1975)。医学中央雑誌 Web による検索結果では、日本の看護教育において OSCE に関する学会発表がされるようになったのは 2001 年から、助産師教育においては 2005 年からと、比較的新しい試みであることがわかる。その教育効果や意義についても検証されつつあるが (山本ら, 2013 ; 藤井ら, 2012 ; 長岡ら, 2012 ; 笹本

ら, 2012 ; 原田ら, 2010)、特に助産師教育における OSCE に関する先行研究はほとんどみあたらない。

今回、本学の修士課程助産学実践コース 1 期生の修了にあたり、助産技術を復習し、かつ助産実践能力に関する各学生の課題を明確にすることで、助産師としての臨床への適応をスムーズにすることを目的に修了前 OSCE を実施した。OSCE 受験の学生の行動には、今までの講義内容や学内演習、あるいは実習での経験が影響するものと考えられるが、OSCE 受験の学生の行動への影響要因を明らかにした先行研究はない。また、修士課程における助産師教育としての OSCE について報告された文献も存在しない。そこで本研究では、修士課程の助産師教育における修了前 OSCE を受験する

学生の行動への影響要因を分析し、その特徴を明らかにするとともに、効果的な修了前 OSCE の方法について検討したので報告する。

## II. 用語の定義

客観的臨床能力試験 (OSCE) とは、学生の精神運動領域および情意領域の学習効果を評価し、臨床実践能力の達成度を客観的に評価する技術試験のことである (Harden, et al, 1975)。学生はステーションとよばれる、試験に必要な用具や機器、模擬患者 (模擬産婦) が配置された実際の病棟や外来のような部屋で、一定時間に提示された課題について技能を遂行する。

## III. 目的

- 1) 修了前 OSCE を受験する学生の行動への影響要因を分析し、その特徴を明らかにすること。
- 2) 修士課程における助産課程修了前の効果的な OSCE の方法について検討すること。

## IV. 方法

### 1. 研究デザイン

インタビュー調査による質的帰納的研究を用いた。

### 2. 対象者

修了前 OSCE を受験した本学の助産学実践コース 2 年次生 3 名とした。

### 3. 倫理的配慮

奈良県立医科大学研究倫理審査委員会の承認を得た (承認番号: 852)。研究対象者には本研究の目的と方法およびインタビュー内容、プライバシー保護と匿名性の確保、参加は自由意思であること、途中辞退の自由、研究への不参加による不利益を被らないことについて文書と口頭で説明し、同意を得てからインタビューを行った。また、インタビュー内容の録音と記録は研究協力者の同意を得て実施した。

## 4. インタビュー方法

インタビューは OSCE で使用する評価表の項目と、インタビューガイドを用いた半構造化面接とした。1 人 1 回 60 分程度とし、プライバシー保護のため個室にて実施した。OSCE での 4 場面 (導入、診断・アセスメント、信頼関係構築のためのケア (声掛け、産痛緩和など)、分娩介助) について、学生の思いと、行動に影響を与えたと思う助産学教育 (講義内容、学内演習、実習等) での経験、場面について聞き取りを行った。

## 5. 分析方法

データ分析方法は、修士課程における修了前 OSCE の特徴となる記述部分と、OSCE 受験の学生の OSCE 実施時の行動への影響要因に関する記述部分を抽出しデータとした。抽出したデータの意味を損なわない文脈で区切りコード化した。コード化した意味内容の類似性と相違性を比較しながら類型化し、サブカテゴリー化した。さらにサブカテゴリーを内容別に類型化して抽象度を高め、カテゴリー化した。データ分析については複数の研究者間で分析の過程を共有し、要約やカテゴリー化について繰り返し確認し、検討を重ねた。

## V. 結果

### 1. 修了前 OSCE を受験する学生の行動に影響を与える要因

修士課程の助産師教育における修了前 OSCE を受験する学生の行動へ影響を与える要因として、【実習で獲得した実践能力の発揮】【就職前に再認識され、明確化した課題とモチベーションの上昇】【発揮できなかった本来大切にしているケア】【ケア実施を支えるロールモデルの存在】【学内演習での教員の根本的な実技伝達】【信頼獲得のために大切にしているケア】【実習からのブランクにより薄れた目標や課題とそれに伴う不安】【知識・経験の基盤となる分娩介助手順】の 8 カテゴリーと 29 のサブカテゴリー、59 のコードが抽出された (表

1)。文中、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、コードは〈 〉で示した。

#### 1) 【実習で獲得した実践能力の発揮】

【実習で獲得した実践能力の発揮】には、模擬産婦の存在をはじめとする OSCE という臨床に近い状況設定によって実習経験が呼び起されるという《リアルな状況設定で蘇り、発揮される実習経験》が基盤となっていた。そして、学生は《実習での対象者とのかかわりで教えられたことの発揮》や《実習を通して自信を持ったケアの発揮》、《実習により統合された知識と経験を発揮する》ことができていた。また、《印象に残る実習指導者の指導が息づいた実践》が発揮され、《躊躇する学生の背中を押す実習指導者からの指導》が影響を与えるなど、《OSCE 実施の基盤となる病院実習》が明らかになった。

#### 2) 【就職前に再認識され、明確化した課題とモチベーションの上昇】

《OSCE 実施によってこそ振り返ることができた細かい視点による課題の自覚》《OSCE 実施によってこそ経験できた臨場感のある分娩介助により、課題を再認識した》など、学生は OSCE 実施を通して《薄れていた助産への課題を改めて認識する》ことができていた。また、《OSCE 実施で初めて気づいた自己の課題》《模擬産婦からのフィードバックによってはじめて気づいた課題》といった、OSCE を実施したからこそ自覚された課題があることが明らかになった。そして、《就職前に明確になった課題》だけでなく、《OSCE 実施で出来た全体的な助産ケアの確認》を通して、《OSCE 実施で上昇した助産へのモチベーション》につながっていた。

#### 3) 【発揮できなかった本来大切にしているケア】

学生は修了前 OSCE を受験するにあたり、1 年次の実習前に行われた分娩介助実技テストの印象を強くもっており、同様のものであるという認識で事前準備を行っていた《実技テストの前の分娩介助練習の記憶をたどった事前学習》が明らか

になった。そのため、《事前に立案した計画の遂行に気を取られ、見落とされた観察とケア》があり、《分娩介助実技テストとの違いによる準備不足と戸惑い》が自覚されていた。また、《時間制限に気を取られ発揮されなかったケア》が存在し、《時間をかけて関わりたい気持ちと計画を遂行しなければという気持ちで揺れ動き、十分ではなかったケア》といった《計画遂行を優先したことにより、発揮できなかったケア》があることが明らかになった。

#### 4) 【ケア実施を支えるロールモデルの存在】

学生の OSCE 実施には助産師のロールモデルの存在が影響していることが明らかになった。《目標にしている助産師の姿と生み出すお産の雰囲気》を心の中に強く抱き、実践に結び付けようとしていた。

#### 5) 【学内演習での教員の根本的な実技伝達】

学生が修了前 OSCE を実施するにあたり影響を与えていた経験は、1 年次の病院実習における臨床経験だけでなく、実習より以前の経験である学内演習での教員からの実技伝達やその関係性も影響していることが明らかになった。《学内演習で教員から強調された母子の安全第一》《手添えで伝わってきた教員の本気度》《強く印象に残る学内演習での教員の実技指導と練習の日々》といったことが学生のなかで強く意識される一方、《教員に力を見せられなかった学内での悔しい経験》も学生の OSCE 実施の際に呼び起されていた。

#### 6) 【信頼獲得のために大切にしているケア】

学生は OSCE 実施の際、実習のときと同様に、産婦との信頼関係を築くことを重要視していた。実習を通じて《情報収集を通して関係性構築を図る》ことを心がけ、《受け持つお産に責任を持つ内診実施》を信念として確立し、《信頼獲得を願う産痛緩和ケア》を大切にしており、OSCE 実施の際にもそれらを実践していたことが明らかになった。

#### 7) 【実習からのブランクにより薄れた目標や課題とそれに伴う不安】

表1 修了前 OSCE を受験する学生の行動に影響を与える要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
実習で獲得した実践能力の発揮	リアルな状況設定で蘇り、発揮される実習経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>リアルな模擬産婦の様子から実習の記憶が蘇り、事前には意識していなかったケアを実施</li> <li>より詳細に実習経験を思い出すきっかけとなったリアルな産婦の様子</li> <li>実習で指導された内容だけでなく、まわりの助産師の産婦への声掛けまで蘇るきっかけとなった模擬産婦の様子 ほか</li> </ul>
	OSCE 実施の基盤となる病院実習	<ul style="list-style-type: none"> <li>イメージしやすい病院実習での経験</li> <li>呼び起こされる病院での実習経験</li> </ul>
	実習での対象者との関わりで教えられたことの発揮	<ul style="list-style-type: none"> <li>産婦との関わりから学んだ、関係構築のための笑顔や優しい声での対応の必要性</li> <li>分娩に付き添う存在（助産師）は大きく、産婦への対応が与える影響も大きいと学んだ実習経験</li> </ul>
	実習により統合された知識と経験を発揮する	<ul style="list-style-type: none"> <li>別の機会に修得した2つの経験を統合した形で、OSCE 実施につなげることができた</li> </ul>
	実習を通して自信を持ったケアの発揮	<ul style="list-style-type: none"> <li>自然に発揮できたのは実習で自信を持ってできていたケア</li> </ul>
	印象に残る実習指導者からの指導が息づいた実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎児心音の音響がきっかけで印象に残る実習指導者の指導が蘇り、実践につながった</li> </ul>
	躊躇する学生の背中を押す実習指導者からの指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>受け持つときの責任としての内診という考えをもつきっかけは、躊躇している自分の背中を押してくれた指導者からの指導</li> </ul>
就職前に再認識され、明確化した課題とモチベーションの上昇	薄れていた助産への課題を改めて認識する	<ul style="list-style-type: none"> <li>OSCE 実施によってこそ振り返ることができた細かい視点による課題の自覚</li> <li>OSCE 実施によってこそ経験できた臨場感のある分娩介助により、課題を再認識した</li> <li>OSCE 実施したからこそ、産婦の訴えを聞きつつ確実に分娩介助を進めるためには周囲の協力の必要性を再認識した ほか</li> </ul>
	OSCE 実施で初めて気づいた自己の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>すべて一人で対処しなければいけない OSCE を経験したことで明らかになった、苦手なところやできないところ</li> <li>周りのスタッフも含めて産婦への声掛けを参考に自分に取り入れる姿勢が必要だったと気付く</li> <li>OSCE 実施によって新たに気付かされた分娩予測という課題</li> </ul>
	就職前に明確になった課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な課題が明確化し、就職前に補足するきっかけとなった OSCE</li> <li>OSCE 実施によってこそ呼び起こすことができた経験と感覚、就職前の課題</li> </ul>
	模擬産婦からのフィードバックによって初めて気づいた課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>模擬産婦からのフィードバックがあったからこそ新たに気付かされた分娩予測という課題</li> </ul>
	OSCE 実施で出来た全体的な助産ケアの確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>実習での経験と呼び起こし、模擬産婦や評価者からの全体的な評価により可能となった分娩介助全体に関する確認</li> </ul>
	OSCE 実施で上昇した助産へのモチベーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題が明確になったことによる、自信の減少とモチベーションの上昇</li> </ul>

表 1 修了前 OSCE を受験する学生の行動に影響を与える要因 (つづき 1)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
発揮できなかった本来大切にしているケア	事前に立案した計画の遂行に気を取られ、見落とされた観察とケア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に計画していたアセスメントや行動を遂行することに気を取られたことで見落とされた観察とケア</li> <li>・事前に計画していたことを遂行することに気がとられ、観察がおろそかになり、十分ではなかった診断・アセスメント</li> <li>・時間が経過して産婦の状況が目に見えるようになって、本来すべき観察やケアがおろそかになっていることに気付く ほか</li> </ul>
	分娩介助実技テストとの違いによる準備不足と戸惑い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・OSCE は分娩介助実技テストと同じようなものだと思って事前準備をする</li> <li>・分娩介助演習のようなものだという認識が事前の計画遂行に気を取られ、観察やアセスメントがおろそかになった要因の一つ</li> <li>・分娩介助実技テストの意識が強く、正常にいくものだという思い込みから、必要な観察ができなかった</li> </ul>
	時間制限に気を取られ発揮されなかったケア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間の制限により分娩室移室に気を取られたことで、コミュニケーションを図る意識が欠けた</li> <li>・時間の制限に気を取られ、おろそかになった産痛緩和</li> </ul>
	計画遂行を優先したことにより、発揮できなかったケア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間をかけて関わりたい気持ちと計画を遂行しなければという気持ちで揺れ動き、十分ではなかったケア</li> </ul>
	実技テストの前の分娩介助練習の記憶を辿った事前学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実技テストの前の分娩介助練習の記憶を振り返って事前準備をする</li> </ul>
ケア実施を支えるロールモデルの存在	<ul style="list-style-type: none"> <li>・柔らかい声で笑顔で接する温かい助産師が目標であり、ロールモデルである</li> <li>・ロールモデルとなる助産師が担当するお産は、学生も巻き込んで居場所をつくってくれ温かい雰囲気のあるお産</li> <li>・ロールモデルは、分娩の進行状況を具体的に産婦へ伝え、児の様子を教えて空気を和ませる助産師であり、このままでいいというやる気を引き出していた ほか</li> </ul>	
学内演習での教員の根本的な実技伝達	教員に力を見せられなかった学内での悔しい経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・注意点を理解していることを実技で発揮したい気持ちと、できなかったときの緊迫した教員の反応</li> <li>・頑張ることができるようになった実技を教員の前で発揮できなかった悔しさ</li> </ul>
	学内演習で教員から強調された母子の安全第一	<ul style="list-style-type: none"> <li>・印象に残る、実技テスト前に教員から受けた母子の安全第一を考えた注意点</li> </ul>
	手添えで伝わってきた教員の本気度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感覚と重要性が伝わってきた、教員の力強い手添え指導</li> </ul>
	強く印象に残る学内演習での教員の実技指導と練習の日々	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分娩台での介助で蘇る、実技テストのための練習の際の教員からの指導と練習の日々</li> </ul>

表1 修了前 OSCE を受験する学生の行動に影響を与える要因 (つづき2)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
信頼獲得のために大切にしているケア	情報収集を通して関係構築を図る	・情報収集を通して関係構築を心がける ・看護学生のときから大切にしていた情報収集を通じた関係構築
	受け持つお産に責任を持つ内診実施	・受け持ち開始の助産師の責任として内診を含めた観察を行う
	信頼獲得を願う産痛緩和ケア	・関係構築を図る産痛緩和マッサージ
実習からのプランクにより薄れた目標や課題とそれに伴う不安	実習からのプランクにより薄れた目標や課題	・OSCE 実施によって、自己の課題が薄れていることに気付く ・実習から経過した時間の中で薄れた課題や目標、実践力により不安を呼んだ
	実習からのプランクにより生じる不安感	・分娩台に横になる模擬産婦を前に、久しぶりの分娩介助であることで介助1例目のように感じた不安
知識・経験の基盤となる分娩介助手順	知識・経験の基盤となる分娩介助手順を振り返る	・アセスメントに必要な項目は講義プリントを参考に振り返る ・OSCE の事前準備として振り返ったのは、実習で支えになっていた分娩介助手順

〈OSCE 実施によって自己の課題が薄れていることに気付く〉など《実習からのプランクにより薄れた目標や課題》が明らかになり、課題が薄れていることで《実習からのプランクにより生じる不安》が生じていた。

8) 【知識・経験の基盤となる分娩介助手順】

学生は OSCE を実施するにあたり、〈アセスメントに必要な項目は講義プリントを参考に振り返る〉ことで事前準備をするとともに〈OSCE の事前準備として振り返ったのは、実習で支えになっていた分娩介助手順〉であったことが明らかになった。《知識・経験の基盤となる分娩介助手順を振り返る》ことは、学内演習や実習で獲得した知識や経験を振り返り、呼び起すために実施されていた。

2. 修了前 OSCE を受験する学生の行動に影響を与える要因の関連性

修了前 OSCE を受験する学生の行動に影響を与える要因として明らかになった8つのカテゴリーについて、それぞれの関係性を検討し、関連図

を作成した (図1)。

修了前 OSCE の実施にあたって、学生は【実習で獲得した実践能力の発揮】をすることができていた。その実践には、自己の実習経験や実習指導者との関わりの中で確立した【信頼獲得のために大切にしているケア】が中核となり、【発揮できなかった本来大切にしているケア】が対極に存在していた。【信頼獲得のために大切にしているケア】と【発揮できなかった本来大切にしているケア】は、いずれも臨床での実習を通して獲得した【ケア実施を支えるロールモデルの存在】が重要な要素となっていた。

【学内演習での教員の根本的な実技伝達】と【知識・経験の基盤となる分娩介助手順】の2つのカテゴリーは、学生の修了前 OSCE の実施、ひいては実践能力の発揮において、臨床実習で経験し獲得したものだけではなく、学内での教育や教員との関係性も影響を与える重要な要素であることを明らかにしていた。それらは【実習で獲得した実践能力の発揮】の外核を成し、学生の OSCE 実施

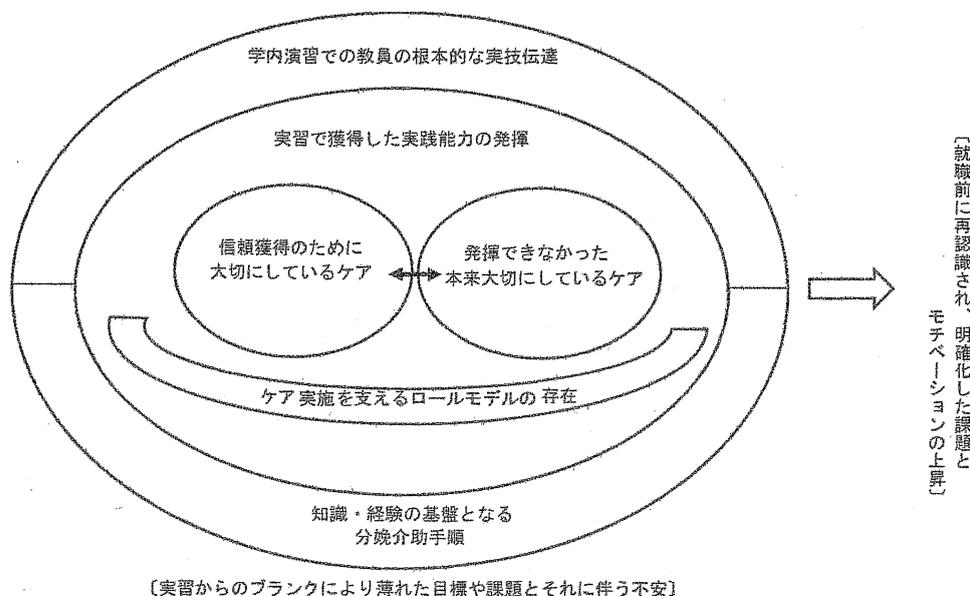


図1 修了前 OSCE を受験する学生の行動に影響を与える要因の関連図

の基盤として存在していた。

【実習からのブランクにより薄れた目標や課題とそれに伴う不安】は、実習終了から助産師として就職するまでに半年以上経過するという、修士課程における修了前 OSCE を受験する学生の心理状態の特徴を表し、OSCE 実施全体に影響を与えていた。そして、【就職前に再認識され、明確化した課題とモチベーションの上昇】は修了前 OSCE の成果として明らかになった。

## VI. 考察

### 1. 修了前 OSCE を受験する学生の行動に影響を与える要因

【実習で獲得した実践能力の発揮】【信頼獲得のために大切にしているケア】【ケア実施を支えるロールモデルの存在】の3カテゴリーは、臨床実習で得られる経験が、実習が終了して半年以上経過した修士課程の助産師学生にとっても、実践能力の発揮に大きく影響を与えることを改めて明らかにしたと考える。全国助産師教育協議会は助産師教育のミニマム・リクワイアメンツの一項目として、助産師としてのアイデンティティの形成を挙げており、「助産の実習を通して、助産師の役割や要求される人間性を意識化し、自己の助産師像を

イメージして述べるができること」を目標として掲げている(全国助産師教育協議会, 2012)。

ロールモデルの存在は、助産師の役割や要求される人間性を意識化し、自己の助産師像をイメージすることの一助となることが考えられる(太田ら, 2009)。修了前 OSCE で実践能力を発揮するにあたり、学生にとってロールモデルの存在が支えになっていたことが本研究によって明らかになったことは、臨床での実習において助産師のロールモデルを獲得することが助産師教育にとって重要であることを改めて示す結果となったと考えられる。

他方、【発揮できなかった本来大切にしているケア】は、学生の中で、1年次の実習前に行われる分娩介助実技テストの記憶が強く残っていることでイメージに引きずられたことが大きな要因であることが明らかになった。その原因の一つには、国内の看護および助産師教育における OSCE の活用が始まったばかりであり定着しているとはいえない現状であることと(小西, 2013)、それゆえに学生の中で OSCE に対する認識や知名度が低かったことが考えられた。このことから、修了前 OSCE 実施にあたっては、事前の告知の方法や実施要項の改善を検討する必要があると考える。しかし一方で、OSCE 実施の際には発揮できな

ったものの、本来は大切にしているケアが存在すること、あるいは時間の制限といった OSCE 実施上の設定や、実際の分娩との乖離がなければ実践していたケアがあるという思いを学生自身が抱いていることも、また明らかになったと考えられる。この背景として、学生が臨床実習での経験で獲得したロールモデルの存在や、それに伴って確立してきた助産観があるがゆえに抽出された要因であると考えられた。

【学内演習での教員の根本的な実技伝達】と【知識・経験の基盤となる分娩介助手順】の2つのカテゴリーが学生の OSCE 実施の基盤として存在したことは、学生の修了前 OSCE の実施、ひいては実践能力の発揮において、実習を経験してもなお、学内での教育や教員との関係性が影響を与える重要な要素であることを明らかにしていた。国内の看護および助産師教育における OSCE に関する先行研究では、OSCE を受験する学生の行動に影響を与える要因について調査したものはないため、本研究の結果は看護および助産師教育における OSCE に関する新しい知見であると考えられる。

修了前 OSCE を受験する学生は【実習からのブランクにより薄れた目標や課題とそれに伴う不安】を抱き、そして OSCE 受験後に【就職前に再認識され、明確化した課題とモチベーションの上昇】を自覚していた。これらのことは、実習終了から就職までのブランクが避けられない修士課程の助産師教育において、修了前 OSCE を実施することの有効性を示していると考えられる。

## 2. 効果的な修了前 OSCE の検討

本研究の結果から、効果的な修了前 OSCE の計画、運営に向けて検討した項目は、1)実施要項および学生への告知方法の改善、2)適切な模擬産婦の選定、3)実際の分娩との乖離を最小限にする状況設定の3点である。

### 1) 実施要項および学生への告知方法の改善

本研究により、OSCE 受験の際に学生は分娩介助実技テストを強くイメージすることで、本来持

っている力を発揮できない側面があることが明らかになった。OSCE とは、学生の精神運動領域および情意領域の学習効果を評価し、臨床実践能力の達成度を客観的に評価する技術試験のことである (Harden, et al, 1975)。実技テストとは異なる視点での評価を目的としている試験であることを実施要項に明示するとともに、学生への告知の際にもその旨を強調し、OSCE に関する知識を事前に定着させ、OSCE に臨む環境を整えることが必要であると考えられる。

### 2) 適切な模擬産婦の選定

OSCE における模擬産婦 (模擬患者) には、通常、専門知識を持っていない一般人を選定するとされている (渡邊ら, 2011)。しかし、今回の修了前 OSCE では、専門職からのフィードバックによってより具体的で臨床経験に根付いた意見が得られることを予測して、臨床で勤務しており、かつ出産経験のある助産師を選定した。その結果、《模擬産婦からのフィードバックによって初めて気づいた助産への課題》が明らかとなり、その内容も産婦の立場だけでなく助産師の立場も含めたフィードバックであった。このことから、助産師教育における OSCE の模擬産婦は、一般人よりも助産師であること、かつ可能であれば出産経験のある者を選定することで効果的な OSCE 実施につながる可能性があると考えられる。

### 3) 実際の分娩との乖離を最小限にする状況設定

試験の性質上、制限時間の設定はやむを得ず、それに伴い実際の分娩経過との乖離が生じることは、分娩介助に関する OSCE を計画するうえでの限界の一つであるといえる。今回の結果からも、《時間制限に気を取られ発揮されなかったケア》があることが明らかになっている。このことから、【就職前に再認識され、明確化した課題とモチベーションの上昇】という修了前 OSCE の効果を最大限にし、学生の自己効力感を高めて臨床への適応をスムーズにするためにも、実際の分娩との乖離を最小限にする必要があると考えられる。その対策

の一つに、制限時間を可能な限り長く設けることと、その制限時間のなかで無理なく実施できる課題内容の選定が挙げられる。課題内容を限定しつつも、精神運動領域および情意領域の学習効果を評価し、臨床実践能力の達成度を客観的に評価するという OSCE の目的を達成するためには、修了前 OSCE を実施するにあたって教育機関ごとにその特徴をふまえて、期待する OSCE の効果や目的を明確にし、課題の焦点を定める必要があると考える。

本研究で得られた結果は修士課程の助産師教育における修了前 OSCE の特徴を示唆しており、修了前 OSCE 実施後に期待する効果や目的を明確にして、効果的な OSCE を計画する際の一資料となり得ると考える。

## VII. 本研究の限界と課題

今回の調査では対象者が本学の学生3名のみと限られていたため、結果を一般化するには限界がある。また、学生の OSCE に対する認識が十分でなかった中での修了前 OSCE の実施であったことにより、特有の結果が抽出された可能性も否定できない。今後は、調査を重ねて結果を蓄積していくことで、修士課程の助産師教育における修了前 OSCE の特徴を明らかにし、一般化することが課題である。

## VIII. 結論

修士課程の助産師教育における修了前 OSCE を実施する学生の行動に影響を与える要因として、**【実習で獲得した実践能力の発揮】**【就職前に再認識され、明確化した課題とモチベーションの上昇】**【発揮できなかった本来大切にしているケア】**【ケア実施を支えるロールモデルの存在】**【学内演習での教員の根本的な実技伝達】**【信頼獲得のために大切にしているケア】**【実習からのブランクにより薄れた目標や課題とそれに伴う不安】**【知識・経験の基盤となる分娩介助手順】の8カテゴリーが抽出

された。そして、効果的な修了前 OSCE のためには、1)実施要項および学生への告知方法の改善、2)適切な模擬産婦の選定、3)実際の分娩との乖離を最小限にする状況設定が必要であることが考えられた。

## IX. 謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に心から感謝申し上げます。

## 引用文献

- 藤井瑞恵, 進藤ゆかり, 内田雅子 他 (2012): 看護 OSCE 受験生の心理的反応および学習意欲の関係と課題—学生アンケート調査を通して—, 第 42 回日本看護学会論文集 (看護教育), 10-13
- 原田竜三, 小澤知子, 田中由香里 他 (2010): フィジカルアセスメントの客観的臨床能力試験の導入による臨床実習での効果と今後の課題, 東京医療保健大学紀要, 6 (1), 51-56
- 小西美里 (2013): 日本の看護教育における OSCE の現状と課題に関する文献レビュー, 上武大学看護学部紀要, 8 (1), 1-8
- 長岡由紀子, 川波公香, 川野道宏 他 (2012): 客観的臨床能力試験を評価に取り入れた演習科目の授業評価—学生の自己評価を中心とした分析, 茨城県立医療大学紀要, 17, 31-40
- 太田美緒, 前田樹海 (2009): 文献に見るわが国の看護教育におけるロールモデルの概念, 長野県立看護大学紀要, 11, 51-61
- R.McG.Harden, M.Setevenson, W.Wilson Downie, et al.(1975): Assessment of Clinical Competence using Objective Structured Examination, British medical journal, 22 Feb, 447-451
- 笹本美佐, 小園由味恵, 奥村ゆかり他 (2012): 実習前 OSCE を通じて看護学生が実感した学習成果, 日本赤十字広島看護大学紀要, 12,

79-87

渡邊由加利, 工藤京子, 山本勝則ほか (2011) :

OSCEにおける模擬患者への支援と模擬患者によるフィードバック, 看護展望, 36 (6), 27-31

山本真由美, 渡邊由加利, 山内まゆみ他 (2013) :

助産学の客観的臨床能力試験を受験した助産学専攻科生の評価, SCU Journal of Design & Nursing, 7 (1), 61-66

全国助産師教育協議会ホームページ 助産師教育のミニマムリクワイアメンツ Vol.2

[http://www.zenjomid.org/activities/img/min\\_require\\_h25.pdf](http://www.zenjomid.org/activities/img/min_require_h25.pdf) (accessed 2014.11.18)